

# 嵐山ニホンザル集団における老齡メスの行動の横断的比較

喜多 耕作

【目的】老体期である 20 歳齢以上のニホンザル (*Macaca fuscata*) における行動の特徴として、活動性の低下と社会的孤立化が挙げられる。加齢に伴って、休息時間が増え、非血縁個体との近接が減少するといわれている。嵐山ニホンザル集団には、他の集団と異なり、老年不妊期である 20 歳齢後半から 30 歳齢前半のメスが暮らしている。そこで、本研究は 21-31 歳齢までの老体期のメスを観察することで、活動性の低下と社会的孤立化傾向の横断的変化を検討することを目的とした。

【方法】嵐山ニホンザル集団の 21-31 歳齢の老齡メス 10 頭を対象とした個体追跡観察を、2017 年 10 月から同年 12 月までの 29 日間、計 102 時間 2 分行った。

【結果・考察】ニホンザルの老齡メスは、加齢に伴って、休息時間が有意に増加することがわかった。しかし、集団内での優劣順位が高い個体や、母ザルがいる個体は毛づくろい回数が他の個体よりも多く、高い社会性を示した。老齡メスの休息時間の個体差は、その個体の社会的な毛づくろいの頻度に関連することが示唆された。また、老齡メスは、加齢に伴って、採食時間が有意に増加することがわかった。しかし、優劣順位が低い個体は、優劣順位が高い個体より採食時間が長かったことから、順位の影響も考えられる。

20 歳齢を超える老齡メスであっても、加齢に伴って、近接関係にある個体が有意に減り、独りでの時間が有意に長くなることがわかった。集団内の順位において、侷れ移順位が高い個体は、優劣順位が低い個体よりも、非血縁個体との関わりが頻繁にみられた。以上のように、集団内での優劣順位によって、独りでの時間と、他個体との近接関係に差がみられた。

これまでの結果から、嵐山ニホンザル集団における 21-31 歳齢までの老齡メスにおいて、活動性の低下や社会的孤立化傾向は確認できたが、集団内での優劣順位や血縁個体の有無といった個体属性の影響を受けるため、老齡個体の行動特徴が急激に目立つ時期あるいは顕在化する時期を特定することはできなかった。

本研究で観察した 26 歳齢以上の個体は、休息時間や独りでの割合に関して、各個体の間にほとんど差はなかった。つまり、26 歳齢以上の老齡メスの間には、活動性の低下や社会的孤立化傾向において、加齢による変化はないと推測される。それは、観察期間が発情期であるにも関わらず、26 歳齢以上の個体は 1 個体を除いて発情している様子がなく、オスとの交尾も確認できなかったからと推測される。このように、繁殖活動が低下することが、活動性の低下と社会的孤立化にも影響しているのではないかと考えられる。

本研究の目的である、活動性の低下と社会的孤立化傾向が急激に目立つ時期を知ることはできなかった。これは、加齢変化とは、個体ごとに差があり、多様性をもつからであると考えられる。そして、加齢変化に多様性があるのは老体期の中でも、発情しておらず、オスとの繁殖行動が見られない老齡個体である可能性が高い。加齢変化に多様性があることを知るためには、老齡個体を横断的かつ縦断的に観察していく必要がある。(比較行動学)